



経験者も未経験者も、みなさん一緒になって子どもを指導しています

明日は、今日より
成長した自分に！

メジャーリーグ
名門の名のもと
名古屋、愛知を制するチームに

約35年前、初代代表の森さんによつて立ち上がった「ドジャース」。チームの名前は、アメリカメジャーリーグ「ロサンゼルス・ドジャース」の関係者と交流があったことから命名されました。「日本でも少年野球を根付かせたいという思いがありました。営利でなく、教育目的だということ、ロサンゼルス・ドジャースが承認したと聞いています」と話す、監督リーダーの内垣幹雄さん。保護者などで構成されるスタッフは、野球経験者だけでなく未経験者もあり、子どもの育成に情熱があるメンバーがそろっています。小学1年生から6年生まで、各学年の監督をまとめているのが内垣さんと総監督。さらにチームの監督、コーチスタッフをまとめているのが田島代表。ドジャ



現中日ドラゴンズの田島慎二選手のお父さんです。活動目的に「人の役に立つ人・頼りにされる人」を掲げ、「厳しく」「楽しく」「優しく」「許す」をキーワードに指導にあたっています。市外から通う子どももいますが、ほとんどが瑞穂区と南区から。土曜、日曜の9時から17時まで練習や試合に励んでいます。「子どもの数が減っていますが、おかげさまでチームにはたくさんの子が通っています」と、マネージャーの渡邊茂さん。取材当日は、入団前の見学に訪れる親子の姿がありました。

「昨日より成長している自分であつてほしい、1日1日、成長するための努力をしてほしいですね」と内垣さんは願いを話します。チームメイトや家族、道具に至るまで、すべてに思いやりをもった子どもに育ってほしいと考え、スタッフは年に5

LA Dodgers
少年野球
巻頭特集

ドジャース

設立から約35年以上を数える「ドジャース」。総勢66人の小学生と、スタッフ23人が在籍しています。野球を通じた成長を目的に、日々の練習に汗を流します。

回ほどミーティングを開き、技術だけにとどまらずコーチングについての話し合いやチームの方針確認などを行っています。

たくさんの方のチャンスを与えて
モチベーション高く楽しむ

昨年、77のチームが参加した積水ハウスカップ軟式少年野球大会で優勝、イチロー杯では3位などの成績を取っています。今年は、278チームで行われたろうきん杯でベスト4を躍進中。6年生チームは年間で12の大会にエントリーしている他、4年生、5年生は15のチームが参戦している瑞穂リーグでトーナメントを行っています。「参加している子どもたち、みんなにチャンスがあります。誰もがスタメンになれる可能性があるんです」と、学年ごとの練習や試合でメンバーはチャレンジを続けています。

練習中は、厳しさを見
せながらも子どもも



この活動に優しいまなざしを送る大人の姿があります。メンバーも道具をきれいに並べたり、チームメイトに声をかけて練習を盛り上げたりと、小学生でありながら規律ある様子が印象的です。「1年生からドジャースで野球をしています」と話すのは、キャプテンの澤田空くん（5年生）。ポジションはキャッチャーで、打撃力はピカイチ。「試合で特大ホームランを打って、相手チームのスタッフが目を見張るほどです」と渡邊さんはうれしそうに話します。練習中もホームベースから大きな声を出して、みんなを鼓舞しています。

「指導で大切にしているのは、挨拶や礼儀など人間的に重要なことです。しっかりと話す、しっかりと返事をするといった基本を子どもに教えています」と言うとおり、子どもたちの挨拶には元気がいっぱい。3年生までは野球を楽しむことを第一にし、4年生から精神的な成長も促しています。会話を通して人の考えを理解したり、チームメイトのピンチを自分たちの力でカバーしようとする心を養ったり、思いやりのスピリットは



プレーにも表れます。リーグ戦に参加する4年生になって、やっとスタッフの指導を理解し始めると話すスタッフ。6年生になると、「言わなくても分かる」とその成果は歴然です。また、卒団時、メンバーはスタッフやチームメイトの前で一人ずつスピーチをします。「私は、涙を流しません、かなり目頭が熱くなります」と内垣さん。在籍した年数だけ、成長してほしい。これがスタッフの願いです。



監督リーダー 内垣幹雄さん
「自分の子どもがきっかけで息子の卒団後も続けています」
キャプテン 澤田空くん
「ホームランを打ったときや試合に勝ったときがうれしい」